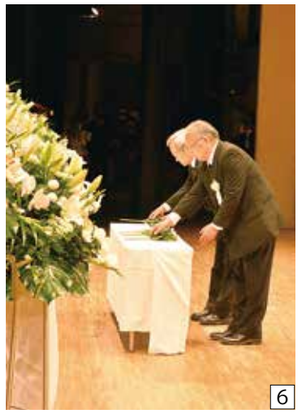
1

2

3

4

5


6

7

1 被災地の代表者らから次世代を担う若者らへヒマワリの花束が手渡された　2 式辞を述べる市長　3 献花し、手を合わせる参列者　4 市の復興を支えてくれた自治体に感謝状を贈る　5 会場前には入場する参列者らが列を成した　6 被災地を代表して献花する川田一馬さん（下原・写真左）と多田英章さん（美袋）　7 復興のシンボルであるヒマワリで飾られた祭壇。被災者が大切に育て、毎年大輪の花を咲かせている

平成30年7月豪雨災害
五周年式典を開催
災害の記憶を後世へ伝える

未曽有の豪雨災害から5年となる7月6日、五周年式典が市民会館で開催され、被災者や復興を支えたボランティアなど、市内外から約700人が参列しました。

式では、全員で黙とうをささげ、犠牲者の冥福を祈りました。市長が、式辞として「これからは心の復興に注視し、災害の記憶を風化させないために皆さまと歩んでいきたい」と述べたほか、職員派遣などにより支援いただいた自治体に感謝状を贈呈。また、被災から復興までの歩みを記録した動画が上映され、この5年間を振り返りました。

式典後、参列者は献花台に白菊を手向け、手を合わせました。

式典の様子を動画で配信しています。

YouTube

あれから5年。若者が今、思うこと

被災地住民代表
小西　一颯 さん

災害を個々の問題と捉えるのではなく、お互いに助け合い、支え合うことが重要。苦しくてつらい状況でも、前に進むためには笑顔でいることも大切だと実感した。

災害を経験して、人の役に立ちたいと考えるようになり、現在は医療の道へ進もうと勉強している。持続可能な未来を築くために、被災した経験を生かして新たな防災基盤をつくり、未来につなげることが私たち若い世代の役目だと考えている。未来に力強く進んで行きたい。

学生ボランティア代表
光簾　郁海 さん

災害発生直後、勇気をふり絞って災害ボランティアの声を上げた。その後も活動を続けたことで、被災地の助けになれたのは今でも自分の原動力になっている。

今は災害の経験を風化させない、過去を忘れない必要性を強く感じている。当時のボランティアたちの活動や、あの日見た被災地の姿を次世代に伝えていければと考えている。災害の記憶を何らかの形で残したり、伝え続けたりすることが大事だと思う。

学生ボランティア代表
三木　勇人 さん

ボランティア活動を通して、被災地で多くの人たちと関わる中で、自助・共助に無限大の力が秘められていることを学んだ。支援をただ待つのではなく、一人ひとりが手を取り合い、助け合うことが重要だと肌で感じた。

「つらい経験」は、考え方次第で将来の自分を導く転機にもなると気付かされた。被災したことをつらい過去だったと終わらせるのではなく、皆さんの未来を照らす転機となるよう願っている。

中学生・高校生向けフォーラム
あの時を忘れない　～後世に語り継ぐ～

市は豪雨災害で被災した後、多くの人の支援を受け、復興へと歩んできました。これまで進んできた道のりから、災害への備えを学び、考えます。

日時　8月1日㈫、午前10時
場所　市民会館
対象　市内在学の中学生・高校生
内容　被災時に何が起き、何が必要か、被災地住民の経験・備えの取り組み紹介など
申込先・問い合わせ　危機管理室（☎0866－92－8599）